
僕の日々。

06

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の日々。

【Nコード】

N8831P

【作者名】

06

【あらすじ】

ごく普通の家庭で暮らす中学生、和波は実は普通では無かった。ある日、和波はそれを両親から告げられて愕然とする。動物と人間によるファンタジーです。

一話（前書き）

修正・復旧完了しました。
では、どうぞ^^

一話

深夜、僕は人の気配で目を覚ました。と言っても、ずつとたた寝だったから、二、三回瞬きをしてから直ぐにその気配の主に目をやった。深夜ということもあって、周りはかなり暗かったけれど、僕は昔から人より夜目が効く。だからそれが誰かぐらいは分かった。僕の妹の未来だ。

未来は暗闇の中で目をこすった。とても眠そうだ。

僕は未来の頭に手を載せて、できるだけ優しく撫でた。

未来の髪は長い。小学校に入ってから前髪ぐらいしか切っていないらしい。後ろから見たら足しか見えない程だ。その色は一体誰から受け継いだのか知らないけれど、とても綺麗な栗色で、可愛さを一層引き立てている。

「また、姉ちゃんに追い出されたのか？」

と僕が聞くと、未来はコクリと頷いた。

「はあ……。まったく、姉ちゃんは……」

そう。僕の姉ちゃんは恐ろしく寝相が悪いのだ。

以前、雷が鳴って怖いから、という理由で兄妹三人で並んで寝たことがある。

互いに布団を寄せ合って、川の字になって寝た。やがて、すぐ隣に人が居る安心感から早くもうとうとし始めた僕に、未来が泣き目になりながら、「場所を代わって欲しい」と言ってきたのだ。

断る理由もなかったので、僕は未来と場所を代わった。そして僕がまたうとうとし始めた頃、不意に腹部に鈍い痛みが走り、続けて体を引つ繰り返された。さらに僕の背中に何か重い物がのし掛かって来た。まあ、その『何か』は姉ちゃんだったんだけど。

そんな事が一時間置きに繰り返され、結局、僕はその日一睡も出来なかった。

しかし、朝になって、その事を本人に聞いても、「え？ 何の事

？」とまるで覚えていなかった。

やがて、僕は一人部屋を貰い、妹と姉ちゃんが二人部屋になった。それからというものの、週に何度か未来は僕の元へ避難してくるようになった、という訳だ。

「クシユン……」

僕が嫌な思い出に浸っていると、未来は小さなくしゃみをした。よく見れば上着を着ていない。

「ああ、ごめんごめん。……ほら」

そう言っ僕は自分が寝ていたベッドに少しスペースを空けた。未来はそこに潜り込むと、すぐ寝息を立て始めた。よっぽど眠たかったのだろう。

僕も目を閉じると、隣に未来の存在を感じながら、心地よい眠りへと落ちていった。

『ピピッピピッピピッピピッピッ』

朝を告げる目覚まし時計は、今日の様な祝日であっても役目を全うしようと頑張ってくれている。

その頑張りに応えて僕は目を開け、またいつもの様に細めた。しかし、今日の空はやや曇っていて、覚悟していたほどの光量は無かった。

僕はいつもの様に目覚まし時計の音を止めようと手を伸ばしかけて、慌てて動きを止めた。

未来が僕の腕の中にいたからだ。

「うう……」

起きるか一瞬焦ったが、すぐに静かになった。

僕は安心して、布団の中に手を戻し、少し考えた。

目覚まし時計は僕の頭上。手を伸ばして止めようとすれば、きっと未来は起きてしまうだろう。今日は天皇誕生日で祝日。平日はレ

ッスンからレッスンへと、とても忙しい未来にはどうかゆつくりと休んで欲しい。

あれこれ方法を考えた後に、しかたなく、一度だけ『パチッ』と指を鳴らした。

やがて、僕の耳の側で、

『チチッ』

と小さな声がした。僕は再び閉じかけていた目を開けた。

すると、僕の顔の横に小さなネズミが餌を持って座っていた。

「やあ、チビ。柿の種は美味しいかい？」

僕がそうネズミに言うと、ネズミはまるで言葉が通じているかの様に、『チチッ』と返事をした。

それから僕は、そのネズミを指差し、続いて時計を指差した。そして、今度は僕の机を指差した。今のは、もしお前が時計を止めてきてくれたら、机の上にある柿ピーをお前にやる。という僕なりの指示だ。もちろんご褒美は用意してある――（実は片付けるのを忘れていただけだったりする）。

すると、ネズミはまた『チチッ』と小さく鳴いて、時計の方に走っていった。つくづく賢い奴だ。

そして、ネズミの『チチッ』という鳴き声に続いて、目覚まし時計が『カチッ』と音を立てて止められた。

そして直ぐ、机の上でこそこそ音がし始めた。どうやら獲物を手に入れたらしい。机の方を見れば、ネズミが三匹、じゃれ合っているのが見えた。

僕はそれを見ながら、一つ欠伸をして、

「さて、僕もあと少しだけ……」

と呟いて、再び目を閉じた。

こんな生活がもうすぐ終わりを告げるとも知らずに。

一話（後書き）

いかがでしたか？

修正による改善は出来たでしょうか？

一話消失事件の復旧ついでに修正もしました。
感想お待ちしております。

二話（前書き）

書いたのは朝なので、寝ぼけた事を書いているかもしれません。
もっと推敲すれば良いんですが、堂々巡りになってしまっんです。
ここからは原作とは少し違う話になってきます。

二話

僕は今、学校への道を全速力で駆けている。自転車でもあれば便利なのだけど、生憎とそういう物は持ち合わせていなかった。

息切れし過ぎて今にも咳き込みそうな僕は、信号に足止めされて初めて呟いた。

「くそっ！ あのネズミ！ 時計止めやがって!!」

そう。こうなることはだいたいの予想出来ていたが、ネズミが目覚まし時計を勝手に止めてしまったのだ。恐らく、ネズミの中では、「時計を止める」「餌が貰える」みたいな式が出来上がっていることだろう。

家から学校まで約一キロ。頑張れば五分で着く。

走りながら僕は時計を見た。この前買った携帯式パソコンだ。

手首に巻いたバンドで表示・非表示が選べる。非表示モードでは、現在の時間とメールチェッカーのみがバンド表面に表示されるが、表示モードにすると、目の前に立体画面が表示され、本格的な機能を使うことが出来る。

今はそんな大層な事に使うわけでもないので、非表示モードのまま、バンド表面に表示されている時計の文字を読んだ。

AM 8:05

よし、間に合う。そう確信して前を向いた。それと同時に信号が青に変わった。僕はスタートダッシュを成功させ、一気に加速した。しかし、僕はとある建物の前で足を止めた。そこは以前雑貨屋があった場所で、よく僕が通っている学校の制服の学生が数人屯している。今日もいつものメンツが揃っていた。

僕はもう一度時間を確認すると、そいつらに「現在八時五分！ 急がないと間に合わないぞ！」と言った。

すると、その中の一人が自分の腕時計を見てから「おう。サンキユ」と笑った。

世話を焼き過ぎたか。

「じゃー!!」

と言つて僕はその場を後にした。

『ダダダダッボタン!!』

教室までの五メートルは殆ど跳んでいた。勢い良くドアを開けて中に入る。

僕は教室の時計を確認した。

八時十一分

「じゃあアア!! セーフ!」

我ながら他人の読書を阻害するのはどうかと思うが、叫ばずにはいられなかった。今ならみんなの非難の視線さえも誇らしく思える。だが、一人だけ放っておけない人物がいた。

「おはよう、和波君」

優しい声で呼びかけてきたのは僕の彼女であり、学級委員でもある真柚だ。

「あ、うん。おはよう」

僕はやつとそれだけ返事をした。そこまでだと、どこにでもいる二人に見えたかもしれない。

しかし、真柚は、

「え? 誰に向かつて言ったの? 私は和波君に挨拶したんだけど」と言ってきた。

さっきも言った通り、僕は彼女に挨拶するだけでしどろもどろになつてしまう程、初心だ。当然、人目のあるところで名前呼びをし合うなんてもつての他だ。

周りの生徒からえくすくすと笑いが聞こえ出した。

ああ、今この場所から消えてしまいたい……

しかし、真柚は、

「どうしたの、和波君？」

と名前呼びを要求してきた。

僕はこういうとき、真柚のスマイルが怖い。

「ぐ……。お、おはよう、ま、真柚……」

公開処刑か。

「よろしい」

そう言くと、真柚は僕を残して読書に戻った。

今の様に、僕らの場合は真柚が主権を握っているのだ。

その後、僕は周りから冷やかしを一身に受けながら席に着いた。
そして、改めて呟いた。

「あのクソネズミ……。！！」

しかし、その声は誰にも届くことは無かった。

三話（前書き）

この話は思いつきで書いたので、飛ばしてもストーリーには何の支障も無いと思います。

ですが、一応、父さん・母さんの初登場なので、読んでいただければ、それぞれのキャラが分かるかと思っています。
では^^

三話

今、僕は自分の部屋でネズミ達をしつけしている。昨日の二の舞はもうごめんだ。

この訓練は、赤、青、白の色紙を使って、人間の言葉を識別させるというものだ。

僕はネズミ達をしつかりと見て、

「いいか？　僕が言った色の所に動いてくれ」と言った。

次に僕は指示をする。

「赤」

すると、五匹とも迷わず赤い色紙へ移動した。

僕が内心驚きながらも、ご褒美の柿の種をあげていると、

「おお。すげえな。お前が飼ってるのか？」

と僕の背後から図太い声がした。ギョツとして後ろを振り返ると、そこには父さんが立っていた。

「と、父さん！？」

「おうよ」

やばい。母さんにチクられたら終わりだ。一年間の僕の苦勞が水の泡になる。

ちなみに、父さんの口はものすごく軽い。

「お前が育てたのか？　三匹とも」

父さんの尋問が始まった。

隠してもしようがないので僕は今までのことを全て話すことにした。

十分後

父さんと僕は和解した。

つまり、母さんには言わない、テレビにも出さない、父さんは何も見なかった、ということになった。

何故こんな好条件を飲んで貰えたかと言えば、日頃の父さんの行いが悪いせいだ。

しかし、父さんは部屋を出るまで惜しそうにテレビの話をずっとしていた。

部屋には母さんが来ていた。間違いなく父さんがチクツたのだ。目が合つと、父さんは母さんの背後で父さんが手を合わせて謝つて来た。

誰が許すか!!

「で？ 話って何？」

「え？ ああ……」

こうなつたら話してしまつた方が楽だろう。

「あのさ、母さんって、動物アレルギーある？」

「無いけど……」

「じゃあさ、今から見せるものに対して、危害を加えないって約束して」

母さんは少し俯いて考え出した。もう僕の心臓は爆発寸前だ。

「いいわ。約束する」

そう言ってくれて、初めて呼吸が出来た気がした。もう一度深呼吸をして僕は言った。

「分かった」

『パチツ、パチツ、パチツ』

すると、机の陰からネズミが三匹出てきた。

チビは直ぐに僕の左手を登って肩に乗った。他の二匹は僕の右手に乗った。

ちらりと母さんの方を見ると、これ以上ないくらいに顔が引きつっていた。

『チチツ』

チビが鳴いた。

それで正気に戻った母さんは、目の焦点を合わせると、言った。

「何？ それ」

僕は溜息をついた。

「ネズミだよ」

「何でそんなのを飼ってるの？ って訊いてるの」

目がだんだん蔽しくなってきた。

駄目か。

「『そんなの』じゃない。ネズミだよ」

「それは分かってるわ」

「じゃあ何なんだよ」

母さんはどう怒って良いか分からないみたいに目を泳がせた。そして、

「トイレはどうしてるの？」

と言った。

「ほら、これ」

僕はハムスター用のトイレを改造したものを取り出した。

「殺菌バクテリアで除菌して、消臭も出来るようにしてある。大きさは十五センチで、部屋の隅に一ヶ所だけ置いてる。トイレはここでするようにしつけたから大丈夫」

チビは僕の肩から降りて机に飛び乗った。

母さんは「そう……」とだけ言うと、手を伸ばしてチビを撫でた。「僕の部屋からは出ないし、餌は柿ピーをあげてる。フーズをあげる事もあるけど、全部僕のお小遣いで買ってるから」

母さんはもう何も言わない。静かにチビを撫でるだけだ。チビも気持ち良さそうに目を細めている。

「母さん。もう、一年も育てて来たんだ。その小さいのはまだ半年だけど、一番賢いんだ」

だから、

「飼ってても良いでしょ？」

母さんは静かに頷いた。そして、言った。

「絶対に死なせたら駄目よ?」

僕は母さんの言っている意味が良く分からなかった。

数秒後、僕は嬉しさのあまり、何度も母さんにお礼を言っていた。

後で聞いた話だが、実は事前に父さんが母さんを説得してくれていたらしい。

四話

その日の僕の安眠は唐突に破られた。

『ズドーン!!』

僕が寝ているベッドが浮いた。たとえばその衝撃の凄さが伝わるだろうか。

「つてあ?」

僕は寝ぼけながら飛び起きると、ベッドの横の窓を開けた。

そして、言葉を失った。

「な、何だよ……これ……」

窓を開けるといつも見えるはずの道路が無い。

いや、道も途中まではあるのだが、家の前の道路は跡形もなく押しつぶされていた。

それも、たった一塊の岩によって。

僕の家の前はマスコミ等で騒然としていた。

当然、現場から一番近い家ということで家には取材の申し込みが殺到した。

そんな中、家族で一人だけ落ち着いている人間がいた。父さんだ。父さんはいつもの様にソファーに座って新聞を読んでいた。それを見た家族は口々に文句を言ったが、父さんは反応という物を見せなかった。

とうとう僕まで怒って、

「父さん! 今はそんなことしてる場合じゃないんだよ!」

と言ってしまった。後から言い過ぎたか? 少し反省しかけたが、それでも無反応の父さんを見てその気持ちは吹っ飛んだ。

続いて文句を言おうと僕が口を開いた瞬間、それより早く父さん

が僕を呼んだ。

「そこに座りなさい。和波」

すると母さんの表情は一変し、テーブルを挟んで父さんと同じ側のソファに座った。姉ちゃんも少しだけ気まずい表情になると、ゆつくりと母さんの隣に座った。妹だけがキョトンとして僕の隣に立っていたが、母さんがこつちにおいでと手招きをすると、直ぐに母さんと姉ちゃんの間割り込むようにして座った。

取り残されたのは僕だけだ。僕は訳が分からず突っ立っていると、父さんは落ち着いた声で、

「そこに座りなさい」

と繰り返した。

僕は言われるままに、父さん達と反対側に座った。

すると、父さんは意を決して話し出した。

「お父さんも今日の事については、内心とても驚いている。だが、いつかこうなるだろうとは思っていたんだ」

そこで僕の顔を見つめ、言った。

「和波、お前の親はこの僕や母さんじゃあ無いんだ」

僕は頭の中が真っ白になった。口は何かを言おうとするが、空気を飲むばかりで一向に言葉は出てこない。一体どういう事だ？ 考えようとしても頭が動いてくれない。

いや、色々な事が頭の中を巡り過ぎて、逆に考えられなくなっている。

母さんは涙ぐみ、姉ちゃんは項垂れている。父さんは頭を垂れて、ただ「すまない」と僕に謝った。

そう言われてやっと、僕の口から言葉が出てきた。

「どういう事だよ」

しかし、父さんはその質問には答えず、ただ下を向いて再び「すまない」とだけ言った。

「何の冗談だつて聞いてんだよ！！」

思わず怒鳴り付けてしまった僕を妹が怯えた目で見ていた。姉ち

やんはその妹の頭をそつと抱えた。

「答えるよ」

わざと声の調子を抑えて言ったが、それが返って威圧感を与えてしまったかもしれない。

父さんはゆっくりと訳を説明し始めた。

その父さんの話をまとめるところなる。

ある日、父さんが母さんを旅行にでも連れて行って喜ばせてやろうと情報誌をあさっていると、面白い記事を見つけた。

その山には化け物が住み、むやみに近づくと連れ去られてしまう事がある。

その記事を見て、父さんは当初の目的を忘れ、是非行きたいと家族に駄々をこねた。

母さんも仕方なく親戚に姉ちゃんを預けると、その山へと向かった。

最初の内は流石の父さんも疑ってこそいたが、麓ふもとの村で情報収集をする内にそれが結構確かな物であることが分かってきた。

その言い伝えは、年に一度、村から一人攫さらわれると言うものだった。いくら探しても見つからず、それどころか探しに行った者さえ帰って来なかったと言われる。

それを聞いて父さんは俄然やる気を出し、母さんや村人の反対を押し切って他の旅行団体と共に山へと登った。

事件が起こったのは山に登ってから二日目の事だった。

一緒に登っていた旅行者の内の一人が、夜に出掛けたきり帰って来なくなつたと言うのだ。

他の旅行者は恐怖に震え、それぞれ下山を始めた。しかし、その下山をした旅行者達は一人として無事に戻ってはいないと、母さんから連絡が届いた。

それ聞いた父さん達は覚悟を決め、残りの全員で下山を試みた。下山し始めた日の夜。ついにその時は訪れた。

父さん達のキャンプが何者かに襲われて、その時見張りをしていた五人がやられたのだ。朝になってその死体を見ると、五人とも鋭い爪に首の急所をやられての即死だった。

しかし、五人の内の一人在銃を持っていて、相手に傷を与える事ができたらしい。

それを知った父さんは仲間の敵を討つべきだと主張したが、他の登山者は山を下るのが優先だと言って誰もついて来てはくれなかった。

それでも父さんは諦めず、血痕をたどる事にした。しばらく行くと、一人の女の人が倒れていた。

父さんは慌てて駆け寄ると、簡単な治療を施した。その人の傷は銃創だったが、ずいぶん近くで撃たれたのか、弾は貫通したようだった。

しばらくすると、その人は目を覚ました。そこで、父さんが声を掛けようとしたところ、何故かいきなり襲いかかるうとした。しかし、それまでの出血のせい、すぐに倒れ込んでしまった。

父さんはもう一度近付くと言った。

「僕は敵じゃない。安心してくれ」

すると、その人は突然泣き出し、「こんな人間は初めて見た。さつきはすまない事をした」と言った。

やがて泣き止むと、その人は父さんにこう言った。

「私はこの山に住む者です。しかし、傷を負ってしまいました。これでは子供を育てる事は出来ない。どうか、私の子を少しばかりの間、預かってはくれませんか？」

そして、子供のいるという所へ父さんを連れて行った。

そこは小さな洞窟で、その中から獣の声と人間の声の混ざり合った様な鳴き声がしていた。

中に入るとそこには獣の子はおらず、代わりに人間の子供が一人

だけいた。

それでも父さんが迷っている、その人は父さんの目の前に土下座をした。父さんは止めてくれと言ったが、「この子を連れて行ってくれるまでは頭を上げない」とその人は止めようとはしなかった。しかたなく、父さんは一ヶ月だけ預かると約束した。

その後、村には無事帰る事が出来た。そして連れ帰った子供を母さんに見せ、訳を言い聞かせた。

そして父さんは母さんを説得して、一ヶ月だけ預かることを了承してもらった。

それから一ヶ月後、父さん達が家に帰り、何事も無かったかの様に過ごしていると、突然一人の女の人が訪ねて来た。その人は、「私はとある山に住んでいました。預けていた子供を引き取りに来ました」

と言つて、肩の傷を見せた。

父さんはその銃創を見て、その人があの時の女性だと分かったが、一ヶ月の間であつても手放すことは辛く、「そんな子は知らない」と嘘を言ってしまった。

それを聞いて、その女の人は哀しげにすると、

「まあ良いでしょう。では、その子が十五になる頃、また迎えに来ます。その時までには答えを出しておいて下さい。良いですね。十五ですよ」

と言った。そして、空高く跳び、建物の向こうへ見えなくなった。

「で、その迎えの日が今日かもしれないって事が」

「そうだ」

「分かった。信じよう」

「そうか」

「……」

「……」

「って、信じられ」『トゴーン……!』

その時、再び轟音が鳴り響き、僕の渾身の突っ込みを思いっきり邪魔した。

五話に続く

四話（後書き）

ついに急展開です。

今まで長い前置きにお付き合い頂き、ありがとうございました。
さて、ここからがファンタジーです。

実はこの第四話、今までとは違い、夜に書いております。
如何でしたでしょうか。

感想・アドバイス等が僕の原動力となっております。

どうか、一言で良いので残して行って下さると、大変助かります。
では、この辺で。おやすみなさい。

五話（前書き）

前回の続きです。
どうぞ。

五話

今回の衝撃は最初のヤツとは何か違う。

そんな胸騒ぎを覚えながら駆けつけると、案の定そこにあったはずの岩の塊は跡形もなく消し飛んでいた。しかし、クレーターはどう見ても大きくなっている。とその時、

「うう……」

もうもうと立ちこめる土煙の中で人の声がした様な気がした。

その声を確かに聞き、僕は駆けだした。

「大変だ！ きつと誰かが巻き込まれたんだよ！」

言いながら僕は土煙の中に飛び込んだ。父さんの止める声が聞こえた気がした。

「大丈夫ですか！ どこに居るんですか！ 返事をして下さい！」

叫びながらクレーターの中心部分まで降りていく。と、不意に何か柔らかい物に抱き留められた。

さらにそれは僕の体を締め付けた。

「え……」

最初こそ心地良かったが、やがて締め付ける力はどんどん増し、これ以上力を入れられたら骨が折れるんじゃないかと本気で諦めかけた程強くなった。

しかし、骨が軋み始めた頃に力は緩み、僕の体は解放された。

「っはあ、はあはあ……」

土煙はすでに落ち着いていて、周りが見渡せる様になった。

呼吸を整え、視線を上げると、そこには一人の女の人が立っていた。見た目はとても美しかった。二十台後半ぐらいに見える。

僕が見取れていると、その人は僕を優しく抱き寄せた。

何故か抵抗は出来なかった。

頭を撫でられたり、頬擦りされたりしたが、僕は何も言わなかった。いや、言えなかった。訳の分からない感情に今にも涙が溢れ出

しそうなのだ。

「泣けばいい」

とても近くで優しい声がした。僕は思わず涙を零した。僕の記憶の中では中学校に入って初めて。止めようと思っても後から後から涙は溢れ出して来た。それだけではなく、涙と一緒に今までの沢山の事を思い出した。

中学校の文化祭や体育祭、主役でありながら居眠りをした中学校の入学式、誰一人として泣かなかった小学校の卒業式、ハプニング続きの運動会、毎行き先の同じ遠足、初めて出来た友達、新入生の大半が風邪で休んだ入学式、おもちゃを取り合っていた喧嘩、最後に聞いた本当の母親の声――

僕はゆっくりと顔を上げた。わずかに覚えていたその顔が目の前の人と重なった。

「お帰り、和波」

僕の名前が呼ばれた。その声を聞き、僕はやっと理解する事が出来た。

沢山の事がぐるぐる回っている頭が落ち着くのを待って、僕は言った。

「ただ……いま……、母さん」

僕はその母親の肌に自分から触れた。そして、その直後、僕は気を失った。

僕の目を覚ましてくれたのは、激しい空腹感だった。寝覚めは最悪だ。

「うう……」

目を開けると同時にやや頭痛を感じて、頭を押さえて体を起こすと、机の上でネズミ達が心配そうにこっちを見ているのが目に入った。

「心配してくれるのか？　ありがとな。僕は大丈夫だ」

そう言ってネズミ達を安心させようと立ち上がると、不意に目眩に襲われた。

「あ——」

足下がぐらつき、平衡感覚が無くなる。受け身が取れないまま倒れそうになる。とその時、

『トスッ』

倒れた僕の体を支える者があつた。

「危ない危ない」

姉ちゃん——いや、今となつてはそうでは無いという事が分かる。なら、もう今まで通りに接する事は出来ない。

「どしたの？　和波。どつか打った？」

義理の義姉^{ねえ}さんは心配そうに僕の顔を覗き込むと、そう聞いてきた。

「頭が少し痛みます」

僕がそう言くと、義姉さんは一瞬傷ついた表情になった。しかし、
「そう……。じゃあ、薬もらってくるね」

と最後には元気よく部屋から出て行つた。

それから僕は朝の事を思い出した。

「母さん……か」

僕は少しだけ寂しい気分になつて思わず呟いた。

すると、僕が座っているベッドの直ぐ横の窓ガラスに『パソコン』

と何かが強くぶち当たつた。

「な！？」

びっくりして振り返ると、下の道路に僕の本当の母さんが頭を押さえて蹲^{ひずくま}っていた。

「もしかして、突っ込んだの！？」

どうやら防弾仕様の窓ガラスに頭から突っ込んだらしい。

僕は窓を開けた。何か声を掛けたい所なのだけど、場合が場合なだけに言葉が見つからない。

すると、その人は僕を見上げて、

「大丈夫？」

と言った。それに僕は思わず、

「こっちの台詞だ！」

と突っ込みを入れた。それを聞いたその人は、

「突っ込みに突っ込みを入れるなんてなかなかやるわね、和波」

と言って僕に向かって勢い良く親指を立てた。

「やかましい！！」

と僕は思いつきり叫んだ。すると今度はさっきとうって変わって

「和波に怒られた〜！」

と泣き叫び始めた。

当然、マスコミはまだいたけれど、どう突っ込めば良いのか分からないといった様子で、何も言わなかった。

このままだと何十分と泣き続けるかも知れないと思って、僕は玄関へ急いだ。猛スピードで駆け下りる時、義姉さんと階段で擦れ違ったが、「外に僕の母さんが来ている」と言う、僕の後について来た。

玄関のドアを開けて外に飛び出した。とその時、僕の母さんに向いていたマスコミの意識が一気に僕達に向いた。

「あ……」

一瞬の間。しかし、次の瞬間にはもう囲まれていた。

「すみませ…」「このクレーターは…」「今の心境を…」「貴方は和波さんで…」「…」「…」

人間が恐ろしいと感じたのは生まれて初めてだった。

「だ…誰か……」

人の声、表情、圧力。その全てが恐ろしく感じた。

僕は思わず耳を両手で塞ぎ、目を閉じて座り込んだ。

駄目だ。身体が動かない。諦め掛けたその時、

「あああああああ！！！！」

という凄まじい声と、

『バン!』

と何かが次々に破裂している様な音が鳴り響いた。

僕は目を開け、耳から手を外した。そうしてやっと気付いた事があった。

その地を揺るがす様な声は他の誰でもない、この僕の口から発せられていたのだ。

六話（前書き）

修行編です。

なんかと間違えて章分けなんかしちゃってますね。
そんなに書くつもり無いのに^^
初心者の戯言です。すみません。
どうぞ。

六話

「ここは……どこだ？」

あれからどうなったんだっけ……

そうだ、目を開けたら叫んで、慌てて止めようとしたら、体から力が抜けて……母さんに抱かれて、空を飛んで……。

で、牢屋、か。

「そもそも何で、こんな所に閉じ込められてるんだ……？」
ん？ 隣に人が……って、母さんか。

とりあえず、母さんを起こそう。

「母さん、母さん。起きてよ」
すると母さんは、

「あと五分」
と言った。

「どこの学生だよ！」

と僕が突っ込むと、母さんが目を開けた。

「ふにゃ？ なんだ、まだ朝か……」
閉じた。

「起きろー！」

頭に付いている耳と思しき物を思いつき引きつ張る。

「ふゃー！？！？」

母さんは絶叫を残して部屋（牢屋）の隅へ跳んだ。

「うおお！？」

突然の事だったので反射的に僕も後ろへ跳ねた。しかも、尋常じやなく。

ここは狭い部屋（牢屋）。僕は背中を強打した。

「ぐう……」

そしてそのまま気絶——しなかった。

壁で跳ね返った僕の体は地面にうつぶせに倒れた。

背中 of 痛みに悶えていると、いつの間にか母さんが側に来ていて、僕の頭の上で脚を振り上げた。

「へ？」

次の瞬間、僕の頭があつた場所に深さ約一メートルの大穴が開いていた。

僕は反射的に頭を引つ込めて躲していた。そして壁際まで這つて逃げると、

「ななな、何！？ 何が起きたの！？」

と我ながら情けない声を上げた。

母さんはゆつくりと僕の方を振り向き、目をぎらつかせながら、

「何故避けた？」

と言つた。

「避けなきゃ死ぬだろ！？」

すると母さんはにやりと笑つて、今度は体をひねつて自分の腰のあたりに拳を固めた。

「ならばこれも避けてみると良い」

そう言つて僕の懷まで瞬間移動した。もといた場所に大きな穴が開いている所を見ると、それが単なる幅跳びであることが分かる。

流石に避けられない。そう思つた僕は避ける代わりに反射的に母さんの脚を蹴ろうとした。しかし母さんが跳んでそれを避けたため、僕の脚は空を切り、代わりに母さんの脚が僕の顔の左側に炸裂した。

「がっ……」

僕は吹っ飛ばされて、また壁で体を打つた。

「うう……」

頭を振つて前を見る。すると母さんは笑い出した。

僕が呆氣に取られてそれを見ていると、母さんはふつと優しい目になり、

「父さん似だな」

と言つた。

「は？」

と僕が顔面をはてなマークで一杯にしていると、母さんは、「その目だよ。相手が強ければ強いほどその目は強くなる。」

と言った。そして、近付いてくると僕の頭をポンポンと叩いた。「才能はあるみたいだね。そこは私似か」

そう言つと母さんは僕から離れた。そして僕に向かって怖い目になつてこつ言つた。

「良いかい？ 我々動物族にとってこの耳はデリケートゾーンなんだ。無闇に触つてはいけないよ」

分かりました。と言つた後、僕はとある事に気付いた。

「『我々』つて事はまだ他に居るの？」

そう聞くと母さんは、

「そつだね。今現世（こうち）に居るのは、ざつと二百匹ぐらいかな？」
と言つた。さらに、

「大半はまともな人間生活が動物生活を送つてるよ」

とも言つた。

「動物生活？」

と僕が聞くと、母さんはやりと笑つた。

「見てろよ？」

と言つと、僕から距離をとつた。

次の瞬間、母さんは一瞬で一匹の狼へと姿を変えた。

「ウァウ（どうだ）？ グルウウ（凄いだろう）」

僕は言葉を失つた。実際に言葉を失っているのは母さんの方なんだが。

母さんに「バウツ（おい）」と言われて僕は正氣に戻つた。

そして率直な感想を言つた。

「絶滅したはずのニホンオオカミが何故ここに？」

次の瞬間、僕は母さんに噛み付かれていた。

七話（前書き）

投稿遅れてすみません。

受験生なもので、時間が無いんです。

一週間に一回投稿できたら良い方ですね、これから

七話

「っはあ、はあ……」

駄目だ。全然捕まらない。

今僕は母さんに付き添われて狩りの練習中だ。でも、朝からずっとやっているのに、一向に捕まえられる気配が無い。

思わずへたり込んだ僕に、頭上から檄が飛んだ。

「もう終わりか！ 獲物を仕留めるまで飯抜きだからな！！」

「へーい……」

「なんだその返事は！！」

「はい！」

「よし。狩りを続ける」

監督するならアドバイスがあっても良さそうなものだけど、母さん曰く、『狩りは本能』だそうだ。

「あ、兎発見。ん？ ラッキー、あいつ怪我してる」

そう呟いて飛び掛かろうとした瞬間、僕の脇をすり抜けて母さんが飛び出した。

「いっただきー！」

「あ、畜生！ 横取りなんてずりーぞ！」

すると、母さんはフンと笑って、

「弱肉教職」

と言った。

「嫌な先生だな」

「違った。弱肉強食だ」

「僕が昨日教えた言葉だね」

「うう……」

昨日は火熾しと母さんに正しい言葉を教える事だけに費やされた。その教えた言葉がこういう時だけ使われるのはとても複雑な心境だ。
「良いから、狩りの続きだよ！」

「でも、止めを刺す瞬間いつも邪魔するじゃん」

「フフフ。まだまだ未熟よの……」

「二日で達人になれって方が無理な話だろ」

「そうか？ 私は一日でなったぞ？」

「どんな環境だよ」

「はははっ。……そういえば和波には話してなかったっけ？」

「ん？ 何が？」

「コレのこと」

そう言っ、母さんはくるりと向きを変えた。

すると、母さんの腰のあたりから尻尾が生えているのが見えた。

「尻尾？」

「そう。和波はまだ人間の意識が抜けてないから生えてないんだね」

「……どうということ？」

「うーん……。教えるよりやった方が早いかな……」

そう言っ、母さんは目を閉じた。すると、母さんの尻尾はみるみる縮み、やがて見えなくなった。

「尻尾が無くなった……」

「じゃあ、一緒にやってみよう」

「へ？」

「まずは目を閉じて」

「あ、うん」

「そしたら狼を思い描いて」

「……」

「それに自分の姿を重ねる……ワ（あ）、ウウウ……（行きすぎた）」

母さんの声に目を開けると、目の前に一匹の狼が座っていた。

「どうということ？」

すると、母さんは人間の姿に戻って言った。

「だから、人間と狼の力を同時に使えるようになるってことだよ」

「そ、そうなの！？」

「ああ、そうさ。でも、一番力が出る状態を長い間維持出来るよう

になるには、もちろん日頃の鍛錬は惜しんじや駄目だよ」

「うん。分かった。……やってみるよ」

僕は目を閉じた。そして、それぞれを頭の中で思い描いた。
狼をイメージして……………僕を重ねる……………。

「お？ なかなか上手いじゃないか」

目を開けてみると、確かに尻尾が生えていた。

「うわぁ……………なんか変……………」

「ハッハッハ。でも、やっぱりお前には才能があるよ」

「ホントに？」

「本当さ。初めてでちゃんと尻尾が出るなんて凄いことだよ。……

おっと、言い忘れてた。狼の力は月の光を浴びることで格段に跳ね上がるんだよ」

「ええ！？ どれくらい強くなるの？」

「うーん……………量ったことはないから分からないけど、大体、二倍から四倍って考えても良いだろうね」

「そっか……………。これが狼の力なんだ……………凄え……………」

「じゃあ、そのまま狩りを再開しようか。これからは母さん心置きなく横取りしていくからね」

「それじゃ意味ないじゃん……………」

「ハッハッハ。ほら、行くよっ！」

「あ、ちよつと待ってよ！」

母さんに付いて走りながら僕は思った。

こんな生活も悪くないな、と。

八話

今日はなんだか母さんの調子がおかしい。悪い訳では無い。むしろ、今までと比べて異常に調子が良いのだ。

朝の狩りでの事だ。急にしゃがんだかと思うと、地面の臭いを嗅ぎ出した。そして、不意に草むらへ飛び込んで、あつという間に兎を捕まえて出てきた。それからも急に駆け出してみたり、木から木へと飛び移ったりしながら、沢山の獲物を仕留めていった。獲物が貯蔵庫に入りきらなくなり、僕がストップを掛けると、母さんは少々狩りを止めた。

「これだけあれば楽に冬が越せるね」

僕がそう言っていると、母さんは、

「そうだね。あ、言うておくけど、母さんは冬眠しないからね？」と笑った。

それでも何か動き足りないようで、僕らが塹^{おへ}にしていた洞穴の前をつろつろしていた。そこで、僕はこう提案した。

「これから僕は暖炉を造るから、手頃な石を採ってきて。やっぱりここには暖房が必要だよ。そろそろ雪も本格的になりそうだし」すると、母さんは待ってましたとばかりに飛び出して行った。

「さて、薪か……」

周りを見渡せば、木は沢山あるのだが、斧がない。

「はあ……。何か無いかな……」

そう言いながら僕は一本の木に近付いた。そして、木に八つ当たりをした。すると、

『メキメキ……』

と木がしなった。「もしかして……？」と呟いて僕は木から距離を取った。

「……」

僕は意識を狼状態へと近付けた。すると、昨日と同じく狼の尻尾

が生えた。僕は拳を固めると、目の前の木に向かって繰り出す。

『メリ……メキメキッ……ドシーン!!』

木は少しずつ傾き、やがては完全に倒れてしまった。

「これが狼の力……」

『狼の力』については、昨日狩りの最中に母さんが教えてくれた。何でも、僕の中に眠っているはずの力の事だそうだ。

たしか、月で二倍、だっけ？

そういえば、今日は朝から月が見えていた気がする。今はもう曇っていてうつすらとしか見えないけど、さっきまで空は晴れていた。たとえばさっきの二倍だったとしても、きっと僕の力は普通の人の力を上回ってしまっているだろうな……。とか、そんな事を考えていると、ちらほらと雪が降ってきた。

「薪にするのに、濡れたら困るな」

そこで僕は木を運ぶことにした。

「よっ……」

持ち上がらない。やっぱりさっきの力は二倍状態のものだったらしい。

「困ったな……」

母さんは採石に行っていて居ないし、月が雲から出てくるのを待っていたら薪が濡れてしまう。

……って、母さんは大丈夫だろうか？

もし、力仕事をしている間にでも元の力に戻っていたとすれば、怪我をしているかもしれない……。

僕は心配になって、探しに行こうと思ったけれど、残念ながら行き先を知らない。

そうになると、今の僕には出来ることがない。

木により掛かって、一人溜息をついていると、不意に声を掛けられた。

「和波なのか？」

名前を呼ばれた事に驚いてそっちを見ると、そこには防寒着に身

を包んだ義父とつさんがいた。

「義父さん……」

義父さんは良く分からないような表情になって、僕を見つめた。

「何の用だよ。こんな所まで」

僕はわざと突き放すように言い放った。しかし、義父さんは怯まなかった。

「も、戻っては来ないか……家に」

「断る」

即答だった。説得しに来たのが、未来だったら少しは迷っていたかもしれないけど、事の発端の義父さんとは今は話もしたくなかった。

「母さんも美紀も、もちろん未来もお前が居なくなっても心配しているんだ。だから――」

「断る!!」

悪いけど帰ってくれ。そう呟いて、僕は義父さんから目を離れた。義父さんはしばらく躊躇った後、向きを変えて山を下る道を歩き出した。

と、その時、

「おやあ？ そこにいるのは昭さんですね？」

と母さんの気の抜けた声が聞こえた。『昭』とは、義父さんのことだ。

「ああ、母さん。帰って来たてんだ？」

振り返ると、洞穴の入り口に沢山石が積んであった。

「え？ あれ全部運んだの？」

と僕が聞くと、

「軽いもんさ」

と笑った。そして、僕の隣まで跳んで来ると、父さんを見た。

「わざわざこんな所まで、よく来て下さいました」

母さんはとても丁寧にお辞儀をした。

「ここでは何ですので家までどうぞ」

僕は今、肉を焼いている。直火で焼くと硬くなってしまふけれど、それは仕方ない。

母さん達は向こうのテーブルで話をしている。義父さんが酒でも持つて来ていたのだろう。二人とも大きな声で騒いでいる。

焼き終わった肉を義父さんが持つてきた皿にのせて母さん達の前へと持つて行った。

「母さん、出来たよ」

テーブルにそれを置いた瞬間、皿の上から肉片が一つ消えた。

「早っ」

突っ込みながら椅子に座ると、いよいよ本題に入った。

「で、義父さんは一体ここに何しに来たの？ 言つとくけど、僕の家はここだからね」

戻る気がない事をアピールして、僕は義父さんを睨んだ。

「その話はもう忘れてくれ。ただ、お前が心配だったただけなんだ」

そう言つて、義父さんは手をひらひら振つた。

「じゃ、何でここに残つてるんだよ。帰れば良いじゃないか」

「まあまあ、和波。落ち着きなつて。昭さんはただ会いたかっただけなんだよ」

母さんはそう言つて肉をもう一欠片口に放り込んだ。

「まあ、一五年近くも育てた子供を突然手放せつてのはちよつと急すぎたしね」

母さんは最後の肉に手を伸ばした。

「一ヶ月に一回はそっちに顔を見せるよ。それで良いだろ？」

僕がそう言つと、義父さんは渋々頷き、この話は終わった。

「さて、呑もう！」

「僕はまだ未成年だから遠慮するよ」

「えゝ！？ 呑もうよ呑もうよゝ」

「やだ。義父さんでも呑んでなよ。僕はもう寝る」

僕はそう言い残して、自分の寢床がある部屋に移動した。腕輪のスイッチを入れて携帯式PSを立ち上げると、僕は真柚にメールを打った。

『明けておめでとう』

すると、送信して直ぐに返事が来た。

『うん。おめでと。って、まだ年明けてないし。ところで、今どこにいるの?』

どうしようか。真柚に僕の嘘は通じない。やっぱり正直に言うべきか。

『今は実家に帰ってるんだ。って言うか、こないだからここに住むことになった』

送信。とまたも間髪入れずに返信が来た。

『ちよつと話そう』

僕はメールに添付されていたダイヤルを選択した。

「もしもし」

『あ、もしもし!?! 住むことになったってどういう事!?!』

「えっと、話せば長くなるんだけど……」

『三十文字以内で簡潔に述べよ』

「突然本当の母さんが現れて一緒に暮らすことになりました」

『オーバーよ』

「さてはひらがな変換したな!?!」

『電話だもん』

「畜生」

『まあ、大体の事は察したわ』

「マジで?」

『私を誰だと思っているの?』

「学年ナンバーワンの秀才、だろ?」

『違うわよ』

「え? 違うの?」

『いや、その……』

いつもそう言ってるから今回は先に言ってみただけ。違ったのか。

『えっと……私は和波君の彼女だから……誰よりも和波君の事を知ってるっていうか……一心同体というか……』

「え？ マジで？」

真柚がデレた……

『当たり前よ。世界中で一番好きなんだから』

「え、あ、ありがと……」

『どういたしまして』

何の会話だ。

「という訳で、冬休みの間はこっちに居るから、年賀状は出さなくて良いからね」

『どういう訳よ』

「え……今、一心同体って言って……」

『和波君』

「はい」

『非科学的な事を言わないの』

「ええ！？ 最初に言ったのそっちだからね！？」

『貴方も人間なら科学的根拠に従って生きなさい』

もう人間とは呼べないと思うんだが。

「ああ、うん。まあ、分かりました」

『じゃあ、そういう事で』

「いや、どういう事——」

『ツーツー……』

「切りやがった……。って、そこで何やってんだよ母さん」

母さんが入り口の陰に潜んでいた。僕が呼ぶと、ビクツとして、見つかつては仕方がない。よくぞ私を見付けることが出来たな、和波よ」

と入り口の陰から飛び出てきた。

「隠せていた部分の方が少なかったよ」
「というか、入り口付近に隠れる所などない。」
「だが、和波も彼女は隠せなかったみたいだな」
「盗み聞きしてたくせに。ま、隠してないし。」
「ああ、真柚のこと？ うん。そうだね」
「人間か？」
「え？ うん。そうだよ？」
「体型は？」
「身長158・2、体重42・5、上から65、49、70」
「……………最低」
「聞いたのはそっちだろうが！」
「和波はこんな子じゃない……………和波はこんな子じゃない……………」
「あ、こら。隅に行くなよ」
「あ、ところで和波」
「ころつと立ち直った！！」
「まあ、あんたならいつかやると思ってたしね。……………そんなことより、私は昭さんをここに泊めてあげようと思うんだけど、和波はどう？」
「義父さんを泊めてあげるのには僕も賛成だけど、最初の一言には賛同できないな」
「そつ。じゃあ、泊める方向で吞みますか」
「何故吞む」
「いやあ、もう既に昭さんが出来上がっちゃて……………」
「そついう母さんの後ろから義父さんがふらふらと現れた。」
「おはようございむあす、船長お。今日も一日ぐあんばります……………」
「……………もう勘弁してやれよ」
「あんたでも良いのよ？」
「良かねーよ」
「つれないね……………。しょうがない、今日はもう寝るとしようー！」
「そうしてくれ」

母さん達が部屋から出て行くと、僕は布団代わりの藁の中に潜り込んだ。

そして、今日も僕は自然の豊かさに感謝して眠りにつくのだった。

八話（後書き）

朝は冷えるな……。

九話（前書き）

えっと、この話はちょっとおすすめしません。

僕の想像だけで惚気を書いているので、とてもベタで強引な感じになっちゃっていると思います。

それでも読むと言っているのであれば、どうぞ。

九話

僕が眠りから目を覚ますと、隣に真柚がいた。

真柚はがっちりと僕の腕を抱きかかえるようにして寝ていた。

「……何だ、夢か」

そう呟いて再び目を閉じようとした瞬間、真柚が僕のほっぺを抓^{つね}った。

「夢じゃないってば!!」

真柚の手に力が入る。僕はその痛さに飛び起きた。

「いでで! 痛い痛い!!」

すると、真柚は手を放し、抓っていた場所に軽く口付けした。

「え。いや、ちよつと何するんだよ!」

「私を置いていった罰よ」

「ご褒美の間違いだろ。」

すると、入り口の方から声がした。

「あゝあ、やってらんないね。……朝からお熱いことで」

そつちを見ると、壁にもたれ掛かるようにして母さんが僕らを見ていた。

「か、母さん! ち、違うんだよこれは……」

「和波君、何が違うの? 私のこと好きじゃないの?」

「うっ……」

「ほらほら。女の子に恥かかせちゃ駄目だよ、頑張んな。あんたも男だろ?」

「僕に何を頑張らせる気だよ!」

「和波君……」

「っていうか、真柚は一体どうやってこんな所まで来たんだよ!」
すると、母さんが手を挙げて言った。

「あ、あたしあたし。あたしが連れて来たの」

「これまた何で!??」

「だって、和波の彼女つてのがどうしても気になって、こっそり見に行ったら、うっかり見つかっちゃった」

「見つかった。……じゃねえよ！ 何で連れて来たのか聞いてんだよ！」

「だって、その子が『愛し合う男と女は一緒にいるべきなんですって……』」

「おい」

「なあに？ 和波君」

「僕とお前がいつ愛し合ったよ？」

「何言つてんのよ。私たちは一心同体でしょ？」

「その話題は昨日終わっただろ！？」

「そうだったかしら？」

「ああ、そうだよ。僕達は一心同体でも運命共同体でもない！」

「私も運命までは一緒にしたいと思ったことは無いわ」

「そこは否定して欲しかった！！」

「あまり私に語り掛けないで。耳が痛いじゃない」

「僕は心が痛いです」

「ここらで言い合いを止めないときりが無い。

「で、そんなに僕のことを嫌いなら、何故こっちに來たんだよ」

「もしかして、さっきの本気にした？」

「嘘で良かった！」

「私はあなたが好きよ。愛しているわ、和波君」

「そう言つと、真柚は藁ベッドの上に僕を引き倒した。」

「ちょ、親の前で何を……」

「すると、母さんは、

「安心しな。あたしはこれでお暇こゝろやすするよ」

と部屋から出て行こうとした。

「待つてよ母さん！ 僕を見捨てないで！！」

僕は声の限りに叫んだが、母さんはちらりと目を向けただけで、そのまま出て行ってしまった。

「さあ、邪魔者もいなくなっただことだし、楽しましょ、和波君？」
「い、イヤ〜〜!!」

「何でこうなった……」

僕は真柚の頭を撫でながら、そう呟いた。

真柚は僕の腕の中で静かに寝息を立てている。

「かずはくん……」

寝言か。そう思って聞き流していると、真柚は、

「わたしをおいていかないでよ……」

と目の縁に涙を溜めた。それは、普段の真柚からはとても想像できないような、頼りなさを帯びていた。僕は思わず、

「ごめんな。真柚」

と囁いて、真柚の体を抱き締めた。

「うう……身体がだるい……」

真柚が起きたのは丁度日が落ちかかった頃だった。

「げっ……もうこんな時間。帰らなきゃ……って、ここどこ!？」

私何で服着てないの!？」

そんな叫び声が寝室から上がり、それを聞いた僕はそこへ急いだ。

「大丈夫!？」

「み、見るな――!!」

「グハッ……!!」

覗き込んだ僕の顔面に石が直撃した。

「あ! ごめん大丈夫!？」

真柚は飛び出してくると、僕の顔を覗き込んできた。

「ああ……うん、何とか大丈夫みたい」

「良かった……。本当にごめんね?」

「え、まあ、良いんだけどさ……その……」

「？」
「あのさ……真柚、服着よう？」
「……………！……………み、」
「『み』？」
「見るなああ！……！」
『スパーン！！』
「ギャー！！！」

「アッハッハ！ まさかこの季節にこんな綺麗な紅葉が見れるなんて！」

母さんは夕食の間中、僕の顔を見ては笑い転げた。
「うるさい！」

そう言う僕の頬には、さっき母さんが言った通り、紅葉のような手形が残っていた。

「だって……だって……」

「いや、良いんだよ。真柚は何も悪くないんだから」

僕はそう言って真柚の頭を撫でた。

「うう……………」

真柚は頬を赤らめて俯いた。

「あゝあ。もうお腹いっぱいだよ。じゃ、あたしはお風呂行って来るからね」

「うん。行ってらっしゃい」

母さんは片手を挙げて、この山の少し奥にある温泉へと歩いて行った。

母さんの姿が見えなくなると、真柚は僕に話しかけてきた。

「ねえ。和波君」

「ん？」

「えっと……ごめんね？」

「ああ、大丈夫だよ。今はもうそんなに痛くないし」

「それじゃなくて……いや、もちろんそれもなんだけど、昨日のこ
と……」

「え？ ああ、こっちこそごめんな。急にいなくなったりして」
「うん。許さない」

「あ……許してはくれないんだ……」

「当たり前じゃない。私を誰だと思ってるの？」

またこの流れか……

「僕の彼女、だろ？」

「違うわ！」

「やっぱり違うんだ……」

「私は和波君のお嫁さんよ!!」

「まじでか!？」

「だって……もう他にお嫁に行けないもん」

照れ隠しということが分かっていても、少しばかり罪悪感が僕の
心を締め付けた。

「そっか……」

「な、何よ！ もっと喜ばなさいよ!」

「え？ ああ、うん。嬉しいよ。ありがとう」

僕がそう言っていると、真柚は僕の肩に寄り掛かってきた。

「これからよろしくね。和波君」

「こちらこそ」

僕はまた真柚の髪を撫で、真柚は目を閉じた。

夕食の片付けをしなきゃな………いや、後で良いか。今はもう

少しこの時間を楽しむとしよう。

十話

今日で、年が明けて一週間になる。義父さん達への新年の挨拶も簡単に済ませて、数少ない僕の友達から届いた年賀状にもきちんと返事を書いた。

ならば、今の僕がする事は一つ。この冬休みに入ってからまったくと言って良いほど手を付けていない、宿題をやることだ。って言うても、半分は真柚が手伝ってくれているからすぐに終わりそうだし、さつきも言った通り、僕にはもう宿題以外にやることがない。まあ、受験生なら受験勉強するのが筋なんだろうが、僕はスポーツ推薦で真柚と同じ高校を受けることになっている。先生曰く、

「お前には篠原がいるだろう？ お前の成績なら二、三日前にちょこつと教えて貰えば確実にしろな。ハッハッハ！」

だそうだし、もちろん、それを真に受けてはいないが、今は勉強するのが面倒くさいというのが大きな理由だ。

かく言う真柚の方も学校から勉強推薦をされていて、向こうの高校もウェルカム状態だそうだし。何てったって、全国模試で五本の指に入る学力だからな。しかも、している勉強は学校で受ける授業と出される宿題だけという、恐るべきセンスの持ち主なのだ。

僕も一時期ではあるものの、真柚からトップを奪っていた時期がある。だが、僕の場合は真柚と違って、努力の成果が実ったことだ。しかし、三年になってからは部活を始めたこともあって、なかなか勉強に集中できずに、あつという間に平均値まで下がってしまった。

なんで三年から部活を始めたかと言えば、少し話が長くなる。

ある日、僕の学校のソフトテニス部（以下、ソフト部）が主催したシングルス大会に人数稼ぎで出場したときの事だ。当時のソフト

部の部長が僕の幼馴染みで、「一回戦だけで良いから出てくれ」と頼んできたのだ。断る理由もなく、僕は「オッケー。最近勉強もつまんなくなってきたし、気分転換には丁度良いかもね」と承諾した。それから一週間ほど、遊びではあるものの、僕はソフト部に仮入部した。それを部長は大喜びしてくれて、ほとんど付きつきりで僕に色々と教えてくれた。

そして当日、僕が会場に行くと、受付の横にトーナメント表が書いてあった。それを何気なく見て、僕はあることに気付いた。

「エントリーナンバー二番……」

思いつきり食わせた。つまり、一回勝てば、二回戦で一番強い相手とあたることになる。

「まじかよ……」

なんの知識もなかった僕でも、それが最悪なポジションだと分かった。当然、エントリーナンバー一番は部長。僕は一回戦だけという約束を思い出して全てを悟った。

「そういうことか……」

結構一生懸命練習したのにな……。でも、いつまでも落ち込んではいられない。僕のエントリーナンバーは二番なのだ。必ず一試合目に入るはずだ。

『今から第一回、長谷中学ソフトテニス部主催によるシングルス大会を始めます』

開始を告げるアナウンスが流れた後、続いて試合の呼び出しが掛かった。

『一試合目は、Aコートで二番対三番。Bコートで四番対五番。Cコートで……』

僕は部長に借りたテニスラケットを取り出して、コートへと足を踏み入れた。

「さて、行つて来るか」

後に僕のサーブは「音速を超える弾」と言われることとなるのだ

が、僕はただ教えて貰ったことを一生懸命思い出そうとしていただけで、速い球を打とうとは思っていなかった。

結果的には、僕がサーブのセットは全て取って、レシーブのゲームは取ったり取られたりだった。

そんなこんなで見事一試合目を勝ち取って、僕はベンチに戻った。すると、スポーツドリンクを飲んでいた僕に部長が土下座をしてきて、こう言った。

「どうやったらあんなサーブが打てるのか教えて下さい!!」

僕は約束通り、次の試合を棄権した。

所詮僕のサーブは今日限りのまぐれ。今まで部長が積み重ねてきた努力に傷を付けてはならない。そう思ってた決断だった。

次の日、部長が家に来た。僕を正式にスカウトしに来たのだ。部長曰く、

「君のサーブがあれば、県、いや、全国大会も夢じゃない!」

だそうだ。僕はもちろん遠慮した。しかし、義父さんが上手いことおだてられ、結局僕は入部することになった。

結果、部長と僕がペアを組んで全国に行きましたとさ。

「こら! ペンが止まってるぞ!」

真柚の声で僕は現在に^{いま}戻ってきた。

「ああ、ごめん」

「またなんか思い出してたの?」

「え? 何で分かったの?」

「私を誰だと思ってるのよ」

「え? お嫁さん?」

「違うわ!」

「違うんだ……」

「私は和波君の家庭教師よ!」

一体どこまで真柚の称号は増え続けて行くのだろうか。

「まあ、否定はしないけどさ……」

「学校では教わらないことを和波君に教えてあげるわ!」

「いえ、結構です」

「何のために家に帰ってきたと思ってるの!？」

「あつちには勉強できる机がないからな」

「……そうね。ごめんなさい。どうかしてたわ、私」

「分かれば良いんだ」

「……勉強を進めましょう」

「……だな」

そうして僕は勉強を再開した。しかし、その間真柚はずっと何か考え込んでいるようだった。

その理由が分かったのはその次の日だった。

真柚の家庭教師のお陰で宿題の方はなんとかなった。真柚には先生の才能があるのかもしれない。

その日、僕は残り少しになった宿題を一人で片付けていた。昼も近くなった頃、突然電話のコールが鳴った。携帯PCを確認すると、相手は真柚だった。僕は迷わずにテレビ電話を起動した。

「はい。もしもし?」

「あら。ちゃんとやってるのね?」

「ああ、もう後は楽なヤツばっかだよ。……真柚のお陰だな」

「どういたしまして」

「で、用事があるんじゃないのか? テレビ電話で掛けてくるってことは大事なことなんだろう?」

「和波君、午後からデートするわよ」

「は? また急に……」

「急じゃないわよ。昨日からプランを練ってたんだから」

「僕が知るかい」

まあ、いつものことなただけだな。

「じゃ、西の駅の前に一時集合でよろしくっ!」

「はいよ」

メモメモ……つと。

「ところで和波君」

僕はメモから顔を上げた。

「ん?」

「そのドアから覗いてる子、誰?」

「ドア?」

僕の部屋は勉強机に座ると、丁度ドアに背を向けることになるため、振り返らなければいけなかった。

「……なんだよ。誰もいないじゃないか」

しかし、ドアが少し開いているところを見ると、誰かいたのは間違いないみたいだ。

僕はドアのところまで行くと、廊下を確認した。やはり、誰もいなかった。

僕は勉強机のところに戻ると、真柚に聞いてみた。

「どんなやつだった?」

「うーん……。髪が長くて……」

髪が長い、か。義母さんはショートだから違うか。

「……めっちゃ可愛かった!」

未来か。

「大丈夫だ。僕の妹だよ」

「なんだ、和波君が実はロリコンだったのかと思ったよ」

「悪いが、僕にその話題を振らないでくれるか?」

「シスコンだったんだね。お兄ちゃん?」

「それは否定が難しいな……」

「ふーん。お兄ちゃん妹萌えだったんだね……」

「真柚。僕のことをお兄ちゃんと呼ぶのは止めてくれ……割と萌える」

もともとちょっとロリ気味だから、そうなるともう妹にしか見え

なくなってくる。

「和波君には幼馴染み萌えて欲しかったなあ……」

「安心しろ。僕は未来と真柚以外に萌えたりしないから」

「……私ちょつと複雑な気持ちよ、今」

何か悪いこと言ったかな？ 真柚が不機嫌だ。

「とにかく！ 西の駅に一時だからね！？」

「何怒ってんだよ。分かったよ。ちゃんと行くよ」

真柚はブイツとそっぽを向いて電話を切った。

……ところで、一体どこに行くのだろうか？ 遊園地に行くなら結

構お金を持って行った方が良いな。

この大事な時期にデートをするなんて、二つの意味でバカカップルだな。なんて考えながら僕は家を出た。

十一話に続く。

十話（後書き）

なんか書けなくなってきた……

腕が落ちたか？

いやいや、もともと落ちる腕がない。

よし。あと三話でこの話は終わらせる！
そういうことで。

十一話

僕はまた腕時計に目をやる。

……遅い。

あれほど自分で念を押していたにも関わらず、真柚は時間を過ぎても一向に見えない。

「真柚のヤロー……」

口に出してぼやいてみる。

だが、辺りには駅員と清掃のおばちゃんしかいない。

風が一層強くなったように感じた。思わず身震いをした。

とりあえず待合室に入ろう。で、次の電車が行ってもまだ来なかったら、その時は真柚に電話してみよう。

「冷えますね」

不意に横から声を掛けられた。清掃のおばちゃんだ。

「そうですね。まだまだ春は遠いんですね？」

僕は結構はつきり答えたはずだが、おばちゃんは返事の代わりにこつとだけすると、そのままどこかへ歩いていった。

風当たりが強くなった気がした。

また一本、電車が僕の目の前を通り過ぎていった。

やっぱり、言うときはガツンと言うべきだろう。

僕は待合室を出て、携帯を起動した。迷わず真柚に電話をかける。

『トウルルル……』

繋がらないかと心配したが、数回の呼び出しの後、電話は繋がった。

「もしもし、真柚か？ 何で来ないんだよ。もう、一時間以上経ってるぞ。……おい、真柚。何とか言えよ。出たって事はそこにいるんだろ？ 返事しろよ、真柚」

向こうからは何も聞こえなかった。……いや、耳を澄ませば何か

くぐもった様な音が聞こえる。

「おい、真柚！ いいかげんに……」

「残念。^{ざーんねん}今、真由ちゃんは電話には出られないよ。だって、俺等に捕まってるからね。アッハッハ！」

「！」

電話の向こうから数人の男達の声が聞こえた。僕は無意識の内に電話とは別にコンピュータの画面を起動した。逆探知開始。

「お前は誰だ！ どこにいる！ 何故真柚の携帯に出てる！」

僕は専門家じゃないから、逆探知には時間が掛かる。どうにかして時間を稼がないと。

「さーてね、どーしよっかな。教えてあげても良いけど、間に合わないと思うな」

「それはどういう事だ」

「アハッ、怖いな！。もつと落ち着きなつて。簡単な事じゃないか。俺等が真由ちゃんを誘拐して、身代金を欲しがってる。ただそれだけの事じゃないか」

「てめえ……！」

よし、逆探知成功！ ……東の港か。畜生、ほとんど街の真反対じゃないか。

「待ってる、真柚！ 今行くからな！」

深呼吸を一つ。それから、意識を集中し、野生の状態を思い出す。「無駄無駄！ 君一人で何しようってんだよ？」

耳が、目が、肌が、全ての機関が研ぎ澄まされていく。身体に力が漲^{みなぎ}ってくる。

行けるか。母さんの様に上手くは跳べないかもしれないけれど、途中で何度か跳び直せば届くだろう。……行ける。

「おい、何をしようとしてんのかは分かんねえが、こっちもお前の居場所くらい分かってるんだぞ？ 少しでもお前が変な行動を取ればこの女の命は……」

「和波！ 私は大丈夫だから来ないで！」

「クソツ！ 押さえてろ！」

電話の向こうで叩くような音が響いた。

その音を耳にした瞬間に、僕は体中の血液が逆流するような怒りを覚えた。

身体が熱くなるのが分かる。

乱暴に携帯の電源をオフにして、真柚のいる方向を向く。構えも適当に、僕は港方面へと跳んだ。

助走無しの幅跳びだ。

目の前に建物の群れが見えた。その中でもダントツに高いビルの屋上に着地する。何人かが驚いてこつちを見たのが分かった。

今の僕はまるで獣だ。髪は肩まで伸び、爪は鋭く、当然尻尾も生えている。

でも、今はそんなことはどうでも良い。ただ、真柚を助けたい。

僕は再び跳ぶ体勢に入る。目をしっかりと開き、目標を確認する。

遙か遠く、少人数に見張られた倉庫を見付けた。

「そこか」

僕は跳んだ。『ターゲット 目標』だけを見据えて。

十一話（後書き）

後一話！！

読んでて自分が恥ずかしくなるような中二作品ですね。。。もともとまとなのが書けるまであと何年かかるやら……。

強制終了の関してのお詫び。

誠に申し訳ありませんが、この作品は打ち切りとなりました。

今回、作者こと06は、小説の作成方針を大幅に変えることにしました。

別に書き続けても良いじゃないかと、思われる方もいらっしゃると思います。

お察しの通り、僕の脳の容量は、大変小さいのです。よって、掛け持ちできる物語数が当然限られます。

後はまあ、気持ちの問題ですね。

「新装開店！」

って感じで再開したいもんで。

今までこの作品を応援してくださった方、通りすがって下さった方に感謝して、これから二週間ばかり、活動を休止したいと思います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8831p/>

僕の日々。

2011年3月21日13時55分発行